四校リーグ 60 年（60 向陽、61 明和、62 菊里、63 旭丘）の歴史

2009　2010　2011　2012

1. はじまり

昭和 24 年（1949 年）、戦後の学制改革の中、旧制愛知一中学が四つの学校に別れた。当時、全国制覇も夢ではなかったバスケットボールの強豪チームが４校に分かれたが、各校が切磋琢磨して強豪となることを願った OB 達が中心となって、４校の競い合う場として、夏のリーグ戦を創設し優勝楯を寄贈した。

その秋には菊里が県大会で優勝し第４回国体に出場を果たした。翌年は四校揃って県のベスト８で活躍した。女子部では全日本の主力になる者もいた。

以来 60 年、一度も欠かすことなく、男女のリーグ戦は続いてきた。

2. 主な歴史

(1) **昭和 54 年頃、**四校リーグの創設者の一人、田中三郎（一中 65 回）がリーグの存続を知り、個人賞（各チームの最優秀選手賞）のブロンズ像等を毎年寄贈する。

(2) **40 回記念大会**（旭丘高校にて）
40 周年記念式典
平成元年８月６日（土）
王山会館
各校の OB、OG、顧問の先生 133 名が集まる。
・この大会の準備のために四校合同 OB・OG 会を発足する。
・今大会より OB・OG 会の支援として、現役戦に**公式審判**をつける。
・田中三郎氏より古くなった楯に変わり現在の**総合優勝旗**の寄贈

(3) **平成６年**
四校リーグ規約を作成

(4) **50 回記念大会**（菊里高校にて）
50 周年記念式典　平成 10 年８月７日（土）　ルブラ王山
126 名が集まり旧交を深めた。

(5) **平成 13 年**
個人賞を取りやめ、ルーキー戦にも公式審判を導入
旭丘高校が校舎改築のため、２日目を千種スポーツセンターで開催

(6) **平成 17 年度**より、できるだけ冷房施設の完備した**公的施設で開催**することとし、各校の分担金を 55,000 円とするとともに、総合優勝や男女優勝の副賞のカップや楯を廃した。

第１回４校リーグが開催される

昭和 25 年卒　精　園　智　彦

４校リーグの 35 周年，（これは明和のバスケットボール部の 35 周年でもある。）を記念して，創立当初のことを何か書いてくれとの依頼をうけたが，何んと云っても古い事なので記憶が正確でない部分もあり，自信がないが，思い出すままに，当時の状況を記すこととする。

明和のバスケットボール部が，本格的に活動し始めたのは昭和 24 年の４月も半ばをすぎた頃であった。その年行はれた学制改革で，学区制が導入され，旭丘，明和など各学校から集った選手の寄り合い世帯として発足した。

今でこそ立派な休育館があるが，当時は，自分達の手で作った砂ぼこりの立つコートしかなく，又、バスケットシューズをはいている者は少なく大部分は裸足で練習を始めた。雨が降れば練習ができないから，数少ない屋内体育館のある東海や菊里への練習試合を名目に押しかけて行って練習した。

４校リーグも又，この時期，学制改革の中から生まれた。

学区制になる前，愛知代表の座を争っていたのは，旭丘の前身，愛知一中と惟信中であり，21 年の代表は愛知一中であったが，22，23 年は惟信が代表になった。そして，24 年こそはと旭丘が猛練習を続けており，実際選手層も厚く，優勝候補筆頭の呼び声が高かった。しかし，24 年から実施された学区制の導入で，各選手は，それぞれの住居に近い高校へ強制的に転校させられた。その時，選手達の分散したのが，旭丘，菊望，向陽，明和の４校というわけである。

これだけではまだ４校リーグは始まらない，旭丘でコーチをやっていた先輩が，優勝のチャンスを目前にしながら，ちりぢりになる選手の心情を思い，又これら４校の親睦と切磋琢磨を期待し，永年の悲願達成の夢を４校にたくして，各校のメンバーに働きかけ開催を呼びかけた。

そして旭丘の大先輩でもあった田中三郎氏に４校リーグの主旨を話した所，優勝楯の寄贈を受けることが出来，大会は目出たく開催の運びとなった。その後最近になり，今も尚４校リーグの続いている事を大変喜ばれ，てこ入れされたのを契機に表彰の内容も改善されて，大会は一段と盛り上っていると聞く。

第１回の４校リーグは 24 年の春，まだ車道にあった菊里高の体育館で男女共４校が集り，リーグ戦を行った。４校の実力は愛知県のトップレベルにあり，４校リーグの優勝校か愛知代表になれると言った感じで，白熱したゲームを展開した。この時は旭丘，菊里，明和が２勝１敗の同率であったと記憶している。

24 年度の愛知代表は，結局主力選手の転校が，一番多かった菊里のものとなった。

明和はこの時，菊里と準決勝で顔をあわせ死闘を演じた。菊里の長身センターがコート上で転倒，足を痛め退場，これが，“故意に足をひっかけた”“いやひっかけない”でエキサイトする場面もあるなど，昔一緒に練習した仲だけに遠慮のないやりとりから正に骨肉の争いを展開したが，最後は菊里の選手層の厚さの勝利であった。

それから苦節５年、昭和 29 年度念願の愛知県代表になるわけであるが，今思ってみてもあんな砂ぼこりの立つコートの中の練習から，よくぞ愛知代表のチームが生まれたものと感無量のものがある。選手諸君の並々ならぬ努力の賜物であろう。

（明和高校バスケットボール部創立 35 周年記念誌よりの抜粋）